

「閉じこもり」関連要因の研究

- 都市と農村の比較 -

平井寛*, 近藤克則**

*日本福祉大学 COE 推進室 **日本福祉大学社会福祉学部

キーワード：閉じこもり，都市的地域，農村的地域

【目的】本研究の目的は在宅高齢者の「閉じこもり」関連要因を明らかにすることである。都市と農村における関連要因の影響の違いを検討する。

【方法】2003年に65歳以上で12保険者に居住する要介護認定を受けていない高齢者59,622を対象に自記式の質問紙調査を行い、32,891人の回答を得た。買い物・通院・散歩などで外出する頻度が週1回未満のものを「閉じこもり」として2値の従属変数とし、関連要因と考えられる身体的、心理的、社会環境的、社会経済的要因を独立変数とした。12保険者を人口密度と第1次産業従業者比率により都市的地域と農村的地域に分類し、各要因のレベルごとの閉じこもり発生割合を一般線形モデルを用いて年齢調整（年齢が影響していたため）して算出した。また年齢調整されたオッズ比を多項ロジスティック回帰分析により地域分類別・性別に算出し、「閉じこもり」と関連する要因を分析した。

【結果】1. 一般線形モデルによる分析結果：全体における「閉じこもり」割合は男性で4.9%、女性で4.6%であった。年齢調整後の地域分類別「閉じこもり」割合は、都市男性4.4%、都市女性3.3%、農村男性5.5%、農村女性5.1%と男性、女性とも農村で有意に多かった。

2. 多項ロジスティック回帰分析結果：「疾病の有無」を除くほぼすべての身体的（ADL 要介助など）、心理的（主観的健康感低い、GDS（Geriatric Depression Scale）によるうつなど）、社会環境的（趣味なし、会参加なしなど）、社会経済的要因（教育年数短いなど）が有意に「閉じこもり」と関連していた。農村的地域においては全ての関連要因について、最も閉じこもりになりにくい条件下（例：表1のGDS 4群）での閉じこもり率が都市的地域に比べ高い。しかし最も閉じこもりになりやすい条件下では（GDS 10群）では都市との差が縮小する。そのため、全ての関連要因で都市的地域において高いオッズ比となっている。例として表2にGDSのオッズ比を示す。

表1 「閉じこもり」発生割合（男性のみ）

	都市男性	農村男性
GDS 10	12.2%	12.2%
5 GDS 9	5.3%	7.2%
GDS 4	2.2%	3.8%

表2 GDSの年齢調整オッズ比（男性のみ）

	都市男性	農村男性
GDS 10	6.5	3.7
5 GDS 9	2.6	2.1
GDS 4	1.0	1.0

【結論】「閉じこもり」は疾病の有無ではなく、身体（疾病以外）・心理・社会的要因と強く関連

していた。都市的地域と農村的地域の間で「閉じこもり」に関連する要因に差異がみられた。身体・心理・社会的な「個人」の要因だけでなく、都市・農村という「地域」の環境要因も考慮すべきことが示唆された。

本研究は 21 世紀 COE プログラムの助成を受けた研究の一部である。